# オタモイ開発基本構想

特集

昨年3月に立ち上げたオタモイ開発特別委員会では、オタモイ周辺の安全性調査や現地を歩いて調べる踏査、さらに文献調査などを行い、開発について議論・検討してきました。

今回は、これまでの成果として、オタモイ開発基本構想を紹介します。

## ■オタモイ開発基本構想

オタモイはその歴史性に加え、自然・地質をキーワードに大きなポテンシャルを秘めています。オタモイ開発は、現在、国定公園となっている夢の跡地旧オタモイ遊園地と塩谷までの海岸線に四季折々の自然や歴史を楽しむことができる整備を行い、再びこの地を夢の場所として、市民生活に豊かさを提供し、小樽観光の高度化につなげることを目指すものです。

オタモイ開発特別委員会（以下「委員会」）が策定したオタモイ開発基本構想は、①ウェルカムセンター、②夢の跡地、③オタモイテラス、④ポンモイへの道の4つの柱で構成しています。開発手法としては、できるだけ自然を生かすものとしています。

### ①ウェルカムセンター（4Pの地図の番号と符合）

オタモイの入口となる施設です。

オタモイは美しい景観の地である一方で、岩盤崩落や地すべりなどが発生している場所でもあります。このようにオタモイは今も動いているという理解の上で、専門ガイド等の管理のもと、いわゆる「オタモイを体験する流儀」を学ぶ機能がウェルカムセンターには求められます。

ここでは、「オタモイLab（ラボ）」「唐門」「シン・七曲り」の3つの要素の整備を提案しています。

オタモイLab（イメージ）



「オタモイLab（ラボ）」は、オタモイに関する総合的な活動・情報発信拠点になります。専門ガイドが常駐し、オタモイにまつわる考古学、歴史、地質、生態などの研究活動拠点としての機能に加え、遊歩道の通年トレッキングツアーや弁天岬への登頂、海岸での活動などを通じてオタモイを学び、楽しむためのサポート施設です。

「唐門」は、旧オタモイ遊園地唯一の遺構であり、現在地から移設し、異世界への入口の象徴として活用します。

「シン・七曲り」は、一般車両の進入を規制し、歩行者の利用と環境に優しい自動運転電気自動車のみを通行可とする旧オタモイ遊園地へのアクセスとして、小樽における次世代モビリティへのチャレンジ区間としての役割も担います。

唐門と自動運転の電気自動車（イメージ）

### ②夢の跡地

かつて、オタモイ遊園地があったエリアです。AR（拡張現実）技術を利用し、龍宮閣やオタモイ遊園地を再現したバーチャルな世界を通じて、往時の賑わいを感じることのできる、記憶をテーマとした場所です。ここには、「弁天テラス」「海門」「グランピングエリア」「タイムトンネル」「弁天岬岩頭アタック」といった5つの要素の整備を提案しています。

「弁天テラス」は、弁天食堂跡地に整備する休憩・展望施設です。旧弁天食堂からの眺望は、旧オタモイ遊園地の中でも特に素晴らしく、窓岩（塩谷）までの海岸線を遠望できる唯一のポイントになっています。

「海門」は、ロッキーコーストの威容を楽しむことのできる海上交通とオタモイとの海の出入口になるものです。「袋間（ふくろま）」（昔、鰊漁場に設置された小さな漁港。鰊の水中貯蔵場）を再現し、遊園地以前の鰊漁場だった土地の記憶を再現します。シーカヤックやスタンドアップパドルボード（SUP）などのマリンレジャーの拠点にもなります。

「グランピングエリア」は、快適な設備を整えたラグジュアリーグランピングが体験できるエリアです。食事や素晴らしい夕日・満天の星空を楽しむことのできる、市内ホテル宿泊者に対するオプショナル機能を担ったスタイルを想定しています。

「タイムトンネル」は、龍宮閣跡地へ至るトンネルです。約150mのトンネル内には、映像や音声が流れ、いにしえのオタモイ遊園地を感じることができる仕掛けを装備します。映画『千と千尋の神隠し』冒頭シーンのトンネルのように、今もオタモイ地蔵尊が残る異世界との出入口をイメージしています。

「弁天岬岩頭アタック」は、かつて龍宮閣がそびえていた弁天岬の頂上、海抜130mの展望所と登頂ルートの整備です。登頂ルートは急傾斜であるため上・中級者向けになりますが、展望所は龍宮閣跡地の3倍の高さにあり、龍宮閣からの目線では見ることが出来なかった視界が広がります。ネイチャーガイドを伴う登頂を想定しています。

弁天テラスと海門（イメージ）

弁天岬岩頭アタック（イメージ）